

ふじはる 田舎



奥の部屋で片付け物をしている。「トントント」といふ音が丘所の方から聞えてくる。

おかしいな。夫か何かをきかたんでいるのだろうか。下手な包丁をばきで、大根をも切っているのだらうか？訝ながら行ってみると、それは戸外からのもので、庭の梅をもちで下のバケツに落としている音がした。また五月の節句が終わったばかりである。

「ねえ、まだ早いんじゃないか？」 また梅園にまなうしびをこころみ、

と松が聞く。

「いや、もう落ちてくるのがあまる。一この梅は小粒なのだ。」

この答えであった。それが止鮮なのかは知らないが、まあ気の向いた時にやめて頂くに限ると私は引込んだ。

その言梅は裏の一本だけでもバケツに一杯あつた。梅酒にするためには、一晩水に漬けたなければならない。プラスチックの甕に移し水をかぶせると、甕が二個も必要だった。

翌ローパーに行き、焼酎五ハックと氷砂糖五キロ買つて来た。さて空ビンをかたがた、十個ほどある梅酒のビンがまき満杯である。仕方がないと、平成九年以前のものは、焼酎だけを二升ビンにしようかと移し、梅は梅で大きな鍋に空けて、空まびんを作ることにした。それでも不足な分は、焼き海苔のカラス容器などにも入れたりと苦心惨憺して漬けたのだが、なんと八ビンも出て来て、焼酎も氷砂糖も足らないことになった。

前年移したのもも入れて、梅酒だけのビンが八本、梅の入つた近年のものが四本、今年の物が八本となると我が家は梅酒が、干本もあつたのである。何せ二十五年物の梅酒もあつたことに家である。

また鈴なひの梅の木が一本ある。去年は落ちてに任せ、ていた気がする。梅干しにしよつと夫が言つたが、梅漬けて

五本程車に載せてお帰したとかがあったが
知人もよく持余したよだねって思っ

鹿角島大学建築科の教授でいらした牛田宗義先生が
旧い武家屋敷の保存の目的で、生徒などの論文のために
と借上げていらした家がある。先生が直言をなれると決
まった時、その家は何とかがそのまゝ保存してほしいとの
ご希望だった。私は有宏を募りて、共同で家主になつて
頂いて、その建物を保存しながら田舎を味わつて頂くこ
とを企画した。

その家、仮称「麓庵」の家主の会話は、桐野二郎の
ご父の、氏の初見の『感懐抄』「回し田舎なごだ
といふものだ」と。

それが、長年鹿角島市の生活がかりしてどうもいぢ
つた桐野さんには、この入来はとてまなごい田舎と思
われる場所なのかと私は改めて辺りを見回した。しかし
まだその田舎の魅力が氏を家主を長とさせたに違ひな
らうと思つたよだつた。

私どもの入来に住んで十年近く経つ。いつか新鮮と思

えたと田舎生活にも慣れて、平凡に日々が過ぎていくが
苦手はいつまでも古手のままだ。それ、例年より少く仕
書も衰えている事業も私を甘えてやっている。

一かじと思つて、かつて通勤生活で電車を逃した時な
ど、次の電車を待つその十五分間を何と空しい時間だ
と思つたことが、読物もなく、集出して考えぬよとも
出来ない時間、これが一生の一部であると思つたよ。
バスを待つ、乗換る電車を待つ、逃した電車を待つ。頻
繁に起るこの空白の時間。

今の私にはその可なりながらいが本に纏つてと思
う。旧式のレインをONにしたとき、画面が右の半ばで
の一分間ほどの空気を二十味むくくつものものだ。

田舎車が無くては何も出来ない。電車を待つ、電車
に乗るという時間は、車を運転している時間、書き変
わつているのだよ。それが不申議や可立たないのは、
自分が主体的に動じているからさ。待つのはなごから
だごい思つた。

また東京生活では葉一本でもおめをよんでおけねば

手に入らないし、電車ものをきかして乗るのだから、いつも懐中を確かめていたけれど不手前である。コートは幸いお米は買わずに済むし、何かなんでも歴年の葉ものなどで味噌汁くらいは作れるし、野菜の生産者の直売場へ行けば、二気のように力方の野菜が安くたっぷり買えるので、財政的緊張感も始まらなくて過ごせてしまふ。

都を生活していくも唐土島市の中であらねば、移動して必要な時間をかけるほどよくもないから、東京などの大都会は立上りたもなはない。個人の居住空間は狭くても便利出来ていようならいい。買い物も近くでパート、スーパーなどあつて、簡便を済むことである。文化的な催しも、一十足を伸ばせばよいから、また分野のものが頻りに開催されていく。東京のちよこ通勤先から一度帰るもの、それからもう一度外出掛けるには、時間的にも、経済的にも、体力的にも先ず出来ないうつて美質的の生活ぶり、そして文化的的因襲を浴びていよう。

理想的な中都市の生活をして、時たま、車を小一時間

も走りせねば、と田舎の生活も体験出来るし、薬効のある人浴泉を堪能するのも出来るのだから、唐土島市にお住みの家主さんにはその気にならねば幸せななよと思つ。家主さんにもまたなつたこのホマホマで、十分活用されていると言ふな。私も家主の望むとて我が家の梅や菊を分配出来るようにしたら良かったと遅まきながら気がついた。

来年は、もうとてお米をきかせて、その辺を計画して無駄なく全くと利用出来るようにしよう。そんな、いや、いや、と田舎生活、いづいづい漬かつて、困つたやうな生活している庭の豊かな緑を、日がな眺めているようにしてしまふのが

